アンコールワットについて

石　澤　良　昭

1．なぜランウンドクルーザーか

私は，つい4日前(1991年1月)にカンボジアからもどってきたところです．用件はトヨタ自動車が「ランドクルーザー」を2台アンコール遺跡の保存・修復及び盗難防止のパトロールのために寄贈することになりましたので，それを届けに行ったわけです．1月19日に贈呈式を行ったところです．

どうしてランドクルーザーかといいますと，カンボジアでは雨季と乾季という二つの季節があり，雨季というのはだいたい6月，7月，8月，9月，まあ10月ぐらいまで，実際に一番降るのは9月から10月にかけてです．その間に，1,700～1,800ミリぐらいの雨量が，だいたい一か月で全部降りそそぐということになります．急に水がでますとこれは洪水になります．それで実は遺跡が水びたしになる．そういったときに，カンボジアとタイの国境からいろんな人が遺跡の中の彫刻や浮彫りの一部を持ちだし，バンコックあたりで売るわけです．犯人を自転車やバイクでおいかけたのですけど，どうも間に合わない．とくに雨季のバケツの水をひっくりかえしたような雨が降るときには，やはりランドクルーザーでなければ遠くの遺跡の場所までいけないのです。それに遺跡は必ずしも道のあるところにございませんから，そういう意味でこの2台は盗難防止のパトロールに役立つわけです．

2．カンボジア史の展開

それではさっそく本題に入らせていただきます．カンボジアには1世紀ぐらいにすでに扶南という国があった．ちょうど239年に日本の邪馬台国の卑弥呼の使者が魏に使いをしたときには，それより10年前に同じ三国の呉の孫権が，カンボジアへ使節を派遣していた．そのときにインドのクシャナ朝からカンボジアへ使節が来ていた．そこに中国の使節朱応と康泰という二人の使者が来たわけです．そしてカンボジアで，ばったり，インドの使節と出合ったのです．だいたい229年から230年にかけてだろうと思います．ですから，そのときからすでにカンボジアという国は存在しておりました．この扶南研究は，広島大学におられました杉本直治郎先生が先鞭をつけて集大成されました．そういうふうに3世紀ぐらいからすでにカンボジアという国は存在いたしました．史料を裏付けるものとして出土品が出てきたのです．ちょうど今のメコンデルタのところにオケオ遺跡というのがありまして，これは扶南国の外港だろうと，言われております．そこからはローマのコインがでています．マルクス・アウレリウス（152～158年）のローマ・コインがでてきております．その扶南国の北のほうに真臘という国がありました．チェンラと言っております．

これは中国の史料からなんですが，その北方の真臘国が結局その扶南という国を併合してしまう，征服してしまう．その後，真臘国内では分裂などいろいろな政治的な争いがありまし

た．

9世紀になりまして，アンコール王朝というものができてまいります．そのときには，すでに東南アジアではジャワのボロブドゥールが建造中でありました，ジャワだとかマレーシア，スマトラ島，あの付近にいくつか大きな国もあったようです．アンコール王朝のありますシエムリアップ州，そこへ行くにはメコン川をさかのぼってプノンペンまで，プノンペンからトンレサップ川という川がありまして，それにつながるトンレサップ湖がございます．これは非常に大きな湖でして，雨期になりますと湖の表面積が乾期の三倍に広がる．すなわちメコン川の水が逆流して流入するためです．そして，その湖の東岸奥まったところにこのアンコールワットがございます．9世紀といいますと，アンコール王朝はまだそう大きなものではございません．まだまだ小さなものでした．それで，アンコールワットができたのは12世紀です．ですから，それまでいろんな試行錯誤をしながら，発展があったり，内戦があったり，分裂などがありました．それで9世紀から約300年という準備期間を経て，アンコールワットというああいう大きなものが造られてくるわけでございます．そして，12世紀前半にアンコールワットを建立した後にまた，アンコールトムという大きな宗教都城を造営して，その後に，15世紀にカンボジアは滅びてしまうわけです。

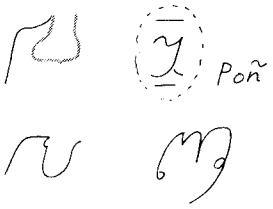
ちょうど1296年に元の使節団がやはりカンボジアを訪れております．その近隣諸国のチャンパ，ビルマのパガン朝，ジャワのマジャパイト朝などが，元の軍隊によって滅ぼされたり，徹底的にやっつけられたりしておりました．カンボジアはその使節が来ましたときに恭順の意をあらわしまして，なんとか丸くおさめてくれたということです．その使節の中に周達観という人がおりまして，中国人で，江南の人なんですが，その人が『真臘風土記』を書いたのです．これは非常に貴重なものでございます．それが1296年，そのときアンコール朝はまだ光輝あふれる栄光が残っていたということです．1350年ぐらいから，西隣のアユタヤ朝が戦争をしかけて来ました．それで何回か戦争を，大戦争をやったのです．そして1431年から1432年にかけて完全にアンコール朝が滅びてしまった．南部へのがれた王たちは，アンコールワットそのものを忘れてしまったのです．そしてその後継王たちは，やはりタイとベトナムの両王朝にはさまれて，あるときには，タイの王朝の支配下に，あるときはベトナム王朝の支配下に入った．プノンペンの近くのウドンの地には，アンコール王朝の末裔の人達がいたのです．1863年にその王ノロドムがフランスと協定を結びまして保護国になった．それはどうしてかといいますと，ノロドム王はこのままでカンボジアがいくと，ベトナムと，タイにやられてしまうと考えたのです．なんとか国を保つためには，どこか外国の力が必要だったのです．シンガポールに来ていたフランスの使節に密かに助けてほしいという使節をおくったわけです．カンボジアはフランスと保護国の協定を結ぶことになったのですが，これは要するにフランスの植民地になることです．

3．アンコールワット発見史

1860年代には，アンコール遺跡については，あまり知られてなかった．ただ，密林の奥にそういう大きいものがあるということは知られていた．それがなんなのかということは当時まだわからなかったんです．文字がどんな文字か，書かれている内容が何なのか，この遺跡がどういう人が作り，どんな経緯で今存在するのか，

わからなかったわけです．アンコールワットの中に，それまでヒンズーの神像が置かれていたのですが，15世紀ごろ上座部仏教の仏像を入れかえたわけです．そして仏教寺院としてあがめてきたわけです．ですから付近の住民は聖地としてアンコールワットをあがめていた．このようにしてアンコールワットはずっと，世の人々に知られていた．カンボジアに来る外国人に，何か森の奥に大きな建物があるという，インフォメーションとしてありました．それからポルトガル，スペインあるいは大航海時代になりますとカトリックの神父さんたちがやってくる．その人たちもそこを訪れているわけです．そしてとにかく得体の知れない建造物があることだけは伝わっていた．ただそれが何なのかということはわからなかったわけです．ところが1879年に遺跡の入口に安置されていた石柱や石板に書かれている文字を読んだ人がいるわけです．それ以前に何度か調査隊が遺跡の入口や壁に彫られている古代クメール文字を見ていたけれども，誰も読みきれなかった．ところが，オランダ人でケルンという人がこれを読みくだした．その文字というのが何なのかといいますと，古クメール語文字でございます．ですから，例えばK600という碑文は，611年の年号があり，すでにこういう文字が書かれていた．このテキストに書かれているのは，奴隷のリストです．当時お寺において奉仕していた人たち，あるいは奴隷のリストです．私たちは奴隷といっておりますが，本当のところ従属的な奴隷ではなく，非常に自由な，そしてお寺のために働く人達だといえます．まあ，お寺を支えるために織物を織ったり，それから食べ物を作ったり，それからロウソクのロウを集めてきたりです．そういう仕事をしていた人達のリストなんです．古クメール文字の解読にだいぶ時間がかかった．この文字をどのように読んでいくかというと，その読み方に問題があるのです．言語学をおやりになっている方は，世界の言語の中で，600年からずっと今まで続いている文字史をやることができる研究材料はあまりないんです．ところが，このカンボジア語は非常に歴史が長いものですから，いろんな語形変化をもち，あるいは語順とか，そうした問題を十分研究ができるようになっています．

1図



実は，この古い文字をローマ字にいたしますと，Poñ となり「ポンニュ」となります．日本語の中にもLとRの区別がないように，カンボジア語の中にもPとV，それからBとの区別がございません．

この「ポンニュ」という人物がこれはタイトルなんです．職称もしくは，当時の社会的称号で，ポンニュと言われている人はかなり地位の高い人であった．そして，その人が奴隷なる奉仕者をお寺に寄附いたしました．差し上げましたというリストなんです．こういう碑文史料が1,050あります．それで長いものは数百行に及んでいるものがございます．これを読むことにより，アンコール時代の歴史が判ってくるわけです．

碑文には「K」という登録番号，カンボジア語の「K」というのがついております．しかし，残念ながらですね，そのアンコールワットはこんな方法で建てました，当時の生活はこんな風

でした，それから人々はこんなことを考えていました，そういう私達が一番知りたいと思っている当時の社会のことが何も書いてない．残念ながら，何が書いてあるかと言いますと，寺院に差し上げた人々の人数だとか，それからどんな供物を差し出しただとか，どんなお祈りをするための道具を用意したとか，なにかそういう宗教に関する事項ばかりです．そしてあとは神様に差し上げた人名だとか，あるいは奴隷の名前だとか，そういったものばかりです．結局のところ，当時の社会だとか，当時の一般的な概念だとか，一般的にどんな生活をしていただとか，なかなか判らないことばかりです．

4．アンコール時代史の解明に向けて

歴史学などというのは総合的な学問ですから，いろいろな史料・出土品・建物・遺跡などを使いながら当時の歴史を解明していくわけです．遺跡の表面に彫られている浮き彫り絵図などを使って，当時はこんな社会ではなかったか，当時はこんな宗教儀礼があったのではないか，史実を挙げてまいります．周達観の『真臘風土記』などから，私たちは多くの史実を知ることができるわけです．碑文・浮き彫り・建築・王朝年代記・旅行記・近隣諸国の言及記録などから，発掘出土品を含めての考察にさらに美術史学，その他を駆使しながらその当時の社会を明らかにしていこうとしております．

フランス極東学院はフランス植民地時代にハノイにあったのです．もちろんカンボジア研究はずっとフランス人がやってきて，かなりの歴史が解明されたのです．その歴史が明らかにされたといっても，王様が何年から何年まで，統治したとか，やっぱり基本的な事項ぐらいしかわかってないのです．或いはいつどういう事件があったとか，いつどんな王様がクーデターを起しただとか，まあそれぐらいの大筋が判っている．ただ当時の社会だとか，住んでいた人々がどんな一般概念を持っていたのかとか，そういうことはなかなか判らない．ですから総論的に申し上げて不明の部分が非常に多いわけです．ですからそういう意味ではこれからの研究を待つわけです．それで実際にアンコールワットは，いつの時代に何の王様によっていつどんな方法で造られたのか，判らない部分が多い．本当に年代が確定したのは1930年代です．アンコールワットは1113年から30～40年間かたったであろう．そして造った王様は，スールヤヴァルマン２世です．ところでスールヤヴァルマン１世だとか，２世だとかいろいろ名前をつけております．例えばジャヤヴァルマン王なんか，ジャヤヴァルマンという名前が何人も出て参ります．最初に出て来た王を１世，次に出て来たのが２世と，私たちはそれに順番に番号をうっているわけです．ですからスールヤヴァルマン王も過去に１回出て来たわけです．それで彼はそのスールヤヴァルマンという名前が出て来てから，何十年か後に，また別のスールヤヴァルマンというのが出て来るから，前者に１世，後者に２世とつけていくわけです．そうすると，かなりの王様がリストアップされていまして，だいたい17～18人の王様の名前が判っております．その王様には第一に実力のある人がなる．必ずしもその息子がなるわけではない．実力が有る者がなっている．その次の王様というのは，どこの出身か判らない．だけど王様になった．地方で実力のある集団がいるといたしましたら，その集団が500人から1,000人の軍隊を持つ，そしてアンコールに攻め上る，その時の王様を追い落として，自分が王位につく．ですからアンコールの諸王は全部つながって非常にきれいに系譜が並んでいる様に見えますが，その内実

はまったく違う血筋の人間が入っているわけです．ですから，アンコール諸王朝と言った方がいいんじゃないでしょうか．それから地方の土豪が突然に王位につく．これをどのようにして王として権威づけをするかと申しますと，そこにはバラモンの血筋を引くといわれる宗務祭司がおり，即位式を執り行ないます．そのバラモンたちは，世襲的に王様の日常的儀礼を執り行い，即位式を挙げることのできる権限を持っている人達です．バラモン家系もまた，権力争いがあり，別のバラモン家系の人達が出て来て，新しい王様を担ぐわけです．それまで即位式を挙げてきた家系の人達を亡きものにしてしまう．その地方に移住させた傍系の人達がその地方の政治集団を担いで攻め上る．そして今まで存在した家系を亡きものにして，傍系が主流になってしまう．実は碑文史料の中に主流派の家系が追っ払われそうになり，如何に主流派がそれまで諸王との関わりを持っていたかということを新しい王様へ直訴した碑文があります．実はその直訴文中にその由来を書いてあります．主流派はジャヤヴァルマン２世という王様のときにこんな事をいたしました．そういうことを綿々と述べているわけです．何年にどの王様がいてというのが実はそこからも判るわけです．そして，如何に主流派が栄光のある家系であるかという事を，その新しい王様にアピールしている．その主流派家系は亡きものにしてしまう．そして王が連れて来た，傍系を盛り立てて，その新家系に乗り換えちゃう．歴史というのは非情なものです．

５．アンコールワットがまだ５か所も密林に残っている

遺跡はカンボジア全土に1080か所残っており，登録されている．そのうちでアンコールワットのような大規模な遺跡がまだ五つ密林の中に残っております．私達はそれをランドサットでその状況を観察しているわけです．で，今どんな状況にあるか，密林がどんな状況であるか，石材がどんな状況であるかということを監視しております．ランドサットなので，例のベトナム軍がカンボジアへ侵攻するときに一番最初にその状況を伝えたのはこのランドサットといわれています．

それら５遺跡は測量が終っているのですが，道がないからそこに行くことが出来ない．そこへ行くとしましたら乾季がいい，要するに雨の降らないときです．雨が降ると川になり，雨の降らないときは干上ってしまう川があるわけです．その河床をジープで行くわけです．途中で川というのはぐねぐねしています．河床には突然大きな石があったりしますが，それでもジープなら行ける．それで途中でテントを張りながら二，三泊して奥地へ入っていくわけです．一つの遺跡を保存修復するのにだいたい30年はかかる．フランス人研究者の中に，やはり結婚もしない，家庭も持たない，そしてアンコール遺跡のために一生を捧げたという人が何人もいる．だって密林の中にある遺跡に入っていますと，まず数ケ月は帰ってこられない．サソリもいれば，猛毒のグリーンスネイクもいる．それから恐しいのはマラリア蚊とかがいる．樹木の上から山ヒルが降ってきたりする．その研究者は一生その家庭とか，そういうものを持つということができない．遺跡のために一生を捧げた人は何人もいらっしゃる．私の先生のベルナール・フィリィップ・グロリエさんは，お父さんが有名なカンボジア学の先生である．ところが日本が1943年にカンボジアへはいりました折，日本の憲兵がスパイの嫌疑をかけました．というのはグロリエさんのお父さんは，無線通信の

ハムの趣味を持っていた．当時ハム通信を世界の各地とやっておりましたから，それでスパイの容疑がかかりまして，プノンペンの刑務所に収容され，そこで亡くなられた．その息子でいらっしゃるグロリエ先生は私を受け入れるにあたっては，非常に複雑だっただろうと思います．学問をやるということで許してもらったんですが…．そのグロリエさんはやはり50歳すぎまで独身でございました．なかなかハードな仕事ですから本当に好きでなきゃできない．遺跡の全貌が解明されてきたのは，そういう人達の努力・献身によるものにほかならないわけです．もちろん現地のカンボジアの方と結婚した方もたくさんいらっしゃいます．

6．アンコール遺跡の崩壊を見つめて

1975年のポルポト政権ができた時に，60名ぐらい遺跡保存修復の専門家や研究仲間がいたのですが，ほとんどが行方不明になってしまった．あるいはフランスへ，難民として逃げ出してきたのはだいたい12～13人知っています．私が1980年，かつての同僚だった3人から手紙をもらったわけです．どうしてかといいますと，日本の特派員がアンコールの現地へ入ったわけです．ポルポト政権が崩壊した後の取材陣第一陣として入り，生き残っていた3名の友人から手紙をもらったわけです．遺跡がすごく傷んでる．だから何とかみてくれないかという話だったのです．とにかく現状を調べようということで出かけたのが1980年です．まあそんなふうにして，実は3名の専門家が今，生存しております．ですから専門家がいない．保存修復工事をする資材がない．それをなんとかしたいと思っている人たちも資金がない．ですから製図をやっている人たちが，木のこっぱみたいなものをペン軸にして，それで製図をやっている．修復するためのノウハウの点で非常に困難に直面している．普通の住宅もそうなんですが，人が住まなくなるというと傷みがひどくなる．要するに壊れるわけです．かつてはアンコールワットおよびその周辺の遺跡はいつもだいたい千人ぐらいの作業員がいて，保守工事をしていました．まずカビを取ったり，水を流したり，それから小動物を追払ったり，例えばこうもりが巣をつくりますと，こうもりの排泄物が雨季の大量の水と共に流れ出してしまう．そうするとその排泄物が石の壁の表面をつたって流れますから，これは表面を剝離させてしまうわけです．それから植物の芽を取り払うとか，いろいろなことをしなくてはいけない．そういう専門の作業員が約千人いた．その作業員の人たちがポルポト時代に強制移住させられたり，あるいは殺されたり，あるいは病気のために死んだりしたのです．もとの職場へ戻って来たのはだいたい70～80人だといわれています．ですから当時保守作業のノウハウを知ってた人達というのはほとんど戻らなかった．ところが新しい作業員たちは，どうやっていいかわからない．まあそういう状況の中で遺跡の保存修復が始められようとしています．すでに2回のユネスコのアンコール遺跡円卓国際会議がありまして，私も日本代表として出席いたしました．1990年6月カンボジア和平会談を東京でやりました時に，その第5項目にアンコール遺跡を「非敵対行為地域」にしようと，4派が合意している．ですからアンコール遺跡の中では安全だというふうに考えております．

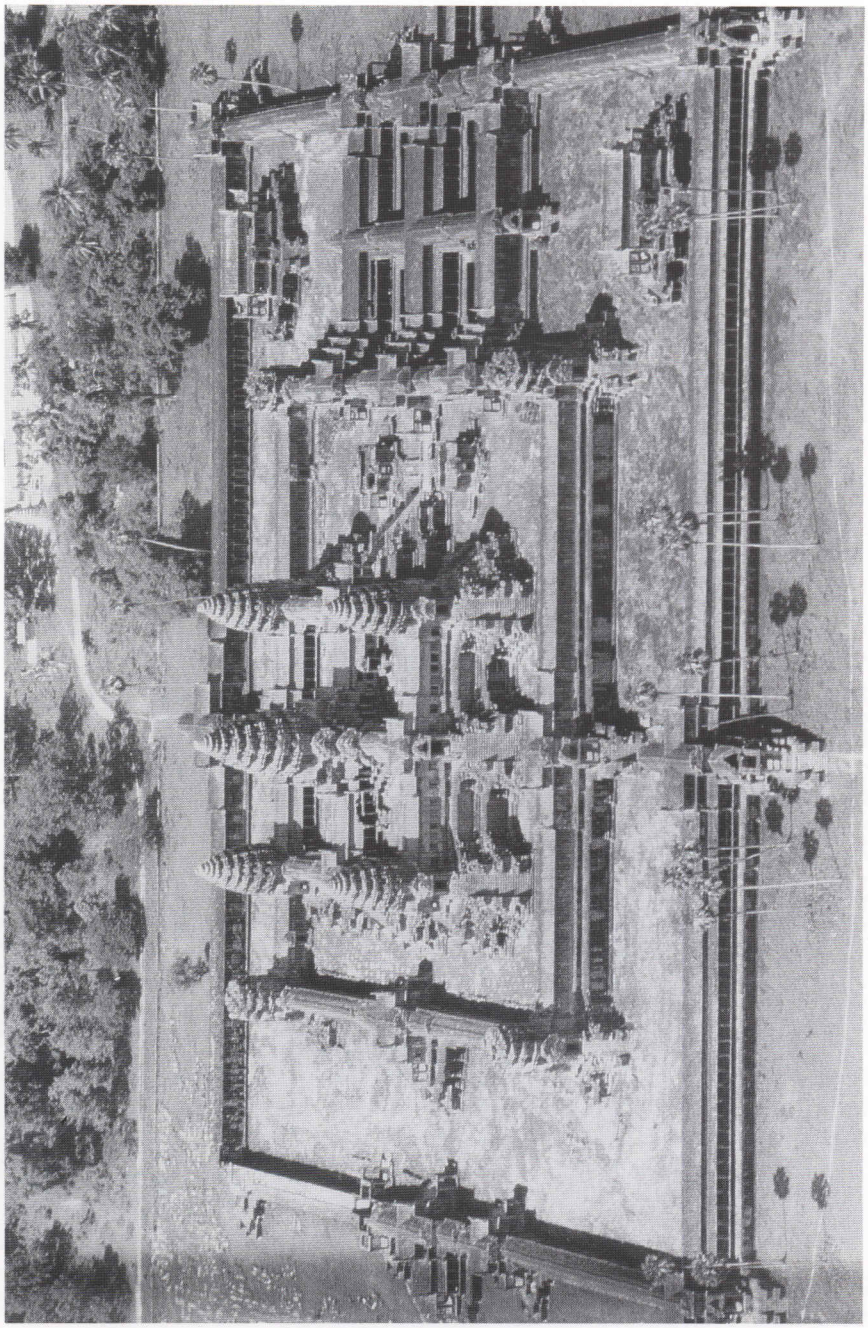
7．美術史学による年代決定

日本は中国から文字，律令制度，仏教などを受容しておりますが，日本の中でこなれてくるのは13世紀ころになってからです．カンボジア

も同じように，インドからいろんな影響を受けます．宗教，諸制度，それから灌漑だとか武器だとか，あるいは王権の思想だとかいろんな影響をうけます．そして12世紀に今のようなアンコールワットを作りだしたわけです．カンボジアの美術はインドの美術とは全然ちがうわけです．日本の美術と中国の美術が違うように違うわけです．ですから民族の美の基準というものが違ってきております．ただカンボジアの美術は宗教美術なのです．アンコールワットの年代がなかなかわからなかった．あるいはアンコールトムの年代を300年もまちがってしまったというのが1930年代まで続いたわけです．その時に美術史学の面で，例えば文様だとか，あるいは彫像の変化だとかを詳細に研究し，美術史学として有効な年代決定を提起しております．例えば唐草文様を詳細に分析しますと，時代が変わるとともに文様が変化してくるわけです．この時代にはこういう特徴がというのがわかってまいります．その裏付けとして碑文の年代が決め手となりました．ですから両方法できちんとした年代ができております．寺院建設の石材をどこからとってきたかといいますと，やはり近くのプノンクレーレ山陵です．石材をずっと運び出して使ったので，付近には石材がなくなってしまった．結局遠くから質の悪い石材を持ってきて使わなきゃいけない状況になりました．ですから12世紀後半からつくられたバイヨン，アンコールトムなどは，やはり石材が悪かった．ところがそういうふうにして石を切りだした石切場の現場が今だに残っております．どうやって切り出すかといいますとやはりそれは，非常に高度なテクニックが必要でした．石材の表面にできた小さな穴が二つあいています．あるいは四つあいています．それはどうしたか，石材を運ぶ時に，そこに木の小さな棒切れを差し込み，水をかけるわけです．そうすると膨らむ．そうするとぬけないわけです．それが四本あるからそこに縄をかけてかつぐというわけです．それをかついで上の方へもっていくというわけなんです．それからアンコールワットの石にはですね，接着剤をなにも使ってないんです．石と石との表面のすりあわせを行なった．ですから石と石とをこすっているうちにそこにピタッとくっつくわけです．実は1989年にタプロム遺跡の壁に大きな木が倒れ，その壁をたおしてしまった．そしてそこから出てきた石壁の石材の一つずつがうすいブルー色の石なんです．それが本当にすり合わせたそのまま出てきて，それをまのあたりに見て感動いたしました．まあそれぐらい技術水準としては，非常に高いものでした．

以下の五葉の写真は、石沢良昭『アンコール・ワット』（写真：柳生雄弐・石澤良昭・日本電波ニュース）、日本テレビ放送網株式会社、1989年．収録の中から複写したものである。

アンコールワット・西正面



アンコールワット（北上空から）

アンコールワット本殿中央堂塔

アンコールワット・第２回廊（デヴァター）

アンコールワット・第１回廊東面南側
（乳海攪拌の図）

アンコールワット・第１回廊東面南側（乳海攪拌の図）